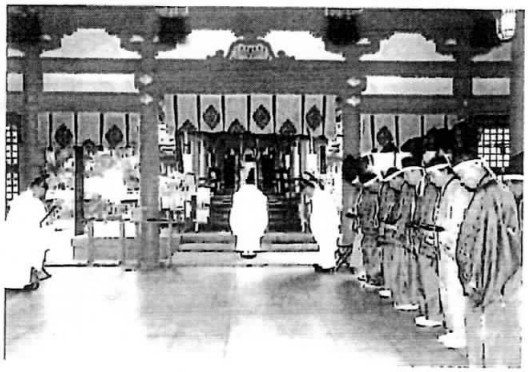
正月歳時記・四

射去祭（いざりさい）

藤崎八旛宮宮司　岩下忠佳



藤崎八旛宮正月の恒例祭は、歳旦祭に始まり十五日の御粥献供祭まで中祭四度・小祭五度が斎行されます。

なかでも一月九日の射去祭は、中祭式で斎行される当宮独特の神事で、平将門追討、勝利祈願の朱雀天皇宣下に由来するものです。

定刻、斎服の宮司以下祭員、烏帽子・直垂の弓太郎以下射手、弓次郎、諸役の順に打ち鳴らす大太鼓を先頭に参進、正面に威儀の大弓・大矢が備えられた拝殿に入り、祭儀が進められます。

宮司の祝詞奏上の後、古式に則り弓太郎以下の射去の儀に移ります。

まず弓次郎、代矢座に上り型の通り矢振りをして射手の順位を定めると、日記が仮座に着き、順次射手の姓名を記帳します。

次に弓太郎、射手（記帳順）、弓次郎、日記、的奉行、幣振りの順に一列に並んで瑞垣の内に入り、神殿を一周し拝殿の前庭に出て、それぞれ定めの座に着きます。

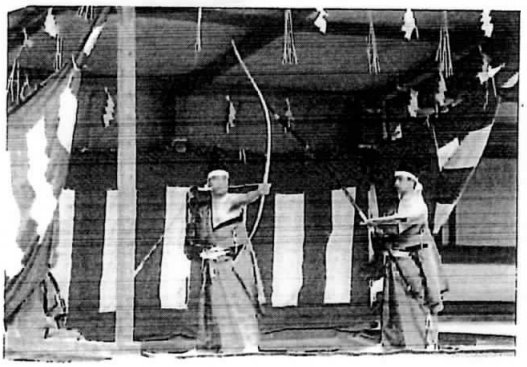
そこで弓太郎は、向拝下の正面申座に進み正座して再拝拍手、申告詞を奏上します。（所作については省略）

一連の儀式の後、弓太郎以下の射手は順次本座に進み出て、北側にかけられた大的に向い甲矢・乙矢の二本を射放ちます。

その作法は、まず甲矢を番え弓を打起して、「天下泰平・皇室弥栄」と祈念し、弓を引込んで満を持し、ひょうと発します。

次に乙矢も甲矢と同じ作法ですが、祈念詞は「五穀豊穣・百姓息災」となります。

最後に弓次郎が締めの行射を奉仕して荒座に退くと同時に、一同再び拝殿に上り元の席に着きます。



続きの祭儀が粛々と進められて新しい年の射去祭は、めでたく納められます。

（註1）朱雀天皇の宣下は、一千七十年前にさかのぼります。以来、各時代を経て継承されてきた射去祭ですが、細川氏入国後は、肥後藩の弓術、日置流道雪派から練達の士が選ばれて奉仕するようになり、その伝統が今に続いています。

宮司が道雪派宗家十八代を継承していますので、祭典終了後、引続き道雪派の神前入門式、昇進者に対しては、允許状授与式を執り行います。終わって参会者一同、境内の先師社に移動し玉串拝礼をするのを恒例としています。

（註2）宮内（藤崎台）の旧社地にあった北鳥居を調伏の鳥居と称していて、射去祭は、この鳥居に大的をかけて矢を放つ祭儀でした。

（明治期の祀職、吉永秀直述）

井川渕に遷座後も大的を北側にかけるのは、この故実を踏襲してのことと思われます。

平成18年